

「無知・無理解・無関心」に関する歴史的考察

高江洲 昌 哉
(神奈川大学非常勤講師)

1 入り口としての「無関心」

本特集への寄稿依頼を受けたあと、しばらくしてから翁長沖縄知事の死去の報があり、マスコミを通して翁長知事の発したメッセージをまとめて確認する機会を得た。本稿は、それらに触発されて考えをまとめたものである。まず、その中から「本土」の沖縄に対する無関心⁽¹⁾を批判した点を取り上げ考えてみたい。この発言を聞いた時、直近に読んだある授業の試験回答文を思い出した。2018年度前期のその授業で、私はLGBTに関する話をしたのだが、学期末試験でこのテーマを取り上げて論述した学生は、「自分は迫害する側で居続けられるという根拠の無い思い込みを無くせば、差別をする人も減ると自分は考える」と書いてあった。警句としてはよくできており、「自分は迫害する側で居続けられるという根拠の無い思い込み」を「自分は安全でいたい」という言葉に読み替えて、そこに丸山眞男の「抑圧移譲」をセットにして考えると、「基地押し付けと無関心」という沖縄をめぐる1つのエッセーとして仕上げることはできるなと思った。だが、そうすると「日本人論」に回収され「宿命論」的なものになる恐れがある⁽²⁾。筆者自身、こうした「宿命論」的な帰結と、関心／無関心という二項対立的な図式で整理することの隘路を避けたいと考えていたので、自分に課していた禁令を破ることになる。もっ

とも、先の回答文は宿命論や本質論という隘路に陥る一例ではなく、「無関心」の人に届く提言だと思って記憶に留めていたので、先のまとめ方は早合点的な独り相撲といえる。そこでひとまず、「宿命論」的な隘路に落ち着くという結論を脇に置いて、「無関心」批判と引用回答文を思い出したことを踏まえて、隘路に陥らないような「相手の身になって考える」思考の身に着け方について書き進めていきたい。

まず「沖縄のことを自分のこととして考える」というのは、沖縄問題などでよく言われる言葉ではあるが、差別的な発言をしている人の振りを見ると、こうした指摘を踏まえて、反省の道に向かうは遠く、現実の有効性は難しいようにみえる。ちなみに、先に引用した回答は、置き換えではなく、自分の立ち位置が不変ではないという指摘である。それでは、「本土」が沖縄のようになることがあるのだろうか。例えば、オスプレイが横田基地に配置されるという報道⁽³⁾があったことを思い出せば、基地被害に悩む沖縄と安全な「本土」という二項対立は自明ではなく、「本土」の中に沖縄と同じように危険性と隣り合わせになる土地が生まれることは確かなので、あながち絵空事のような問いかけではない⁽⁴⁾。よって、「他人事と思っただけの経験が、我がことになる」ということはありえる。しかし、こうした心構えは、先ほ

どのオスプレイの事例を出したとしても、聞いた人すべてが即時的に納得できるものではなく、ある一定の“契機”が必要になるであろう。それでは、次章に「相手の身になって考える」“契機”について考えてみたい。

2 啓蒙の言説・再考

前章で“契機”について述べたが、自他の区別は自明的で固定されており、可変であると想像することが難しい人があることは確かである。そういう人を無視してもよい、または、相手への説得を放棄したような言説が再生産されてきたことが、現状の構図を生んだ一因であると考え。もちろん、この問題への改善は即効性がないので、ゆっくりと取り組むしかないし、私に妙案があるわけではない。とはいえ、教育の場にいるので授業を通して、少なくとも差別的心性の拡大再生産を回避するためにも、世の中はいろいろな考えの人が混じっていることを、どのように教え、気づかせるかを模索してきたので、この点から考えを述べてみたい。そのときに留意していたことであるが、先ほど「通じない言説」と述べたが、最近では啓蒙の言説というものも流行らないし、聞く方も上から目線ということで反感をもつこともある。よって、啓蒙的に説いて気づいてもらうことは難事である。

そこで私が行った1つの実践を紹介したい。こちらは「衛生・健康・福祉から考える近現代日本の歩み」をテーマにした授業で薬害を取り上げた回のものである。この授業の冒頭、「質問①：医療の進歩もしくは社会全体のため薬害が起きるのはやむを得ないと思うか、質問②：自分が被害を受けたら「やむを得ない」と思うか、質問③：①・②の回答を見てどう思ったか」という質問を、間隔を置いて問うてみた。③の学生回答を見ると、矛盾がないという回答、人間である以上当たり前、「他者が被害に遭う分には、関係がないと思

い壁を作ってしまうが、自分の問題になると深く考えなくてはならないと思う部分があった」と、無意識におこなう態度変化に気づききっかけになった。「相手の身になって考える」契機とは、こうした、段階的な作業や、自分の心の中にある二重基準に気づかせる場をつくっていくことにあるといえる。

また、この薬害の授業の最後に、薬害訴訟による和解実践の1つで、再発防止学習のため厚生労働省が作成した「薬害を学ぼう」というパンフレットを紹介した。このパンフレットには、日本で起きた主な薬害の事例が載せられている。このパンフレットを取り上げたあと、学生に「このパンフレットを使った学習の最後に、〇〇年に起きた薬害は次のうちどれか、薬害名とその内容が正しいものはどれかという、試験でおなじみの設問をしたら薬害は無くなると思うか」と質問⁽⁵⁾をしたら、首を振ったり、苦笑をする学生がいた。この点を踏まえ、次に、平和学習について考えてみたい。平和学習でも戦争の歴史を知ることで平和の維持に貢献しようと言われているが、何年になんという戦争が起きたかを知っても、戦争の再発防止に役立つかどうかは疑わしい。薬害の再発防止にせよ、平和を維持するにせよ、教育的に提言される「歴史を知る」とは単に事実の暗記的な学習でないことは確かである。

さて、ここで沖縄問題に戻るが、沖縄問題が議論される際、「沖縄の歴史を知らなければいけない」とよく言われるが、ここで言う沖縄の歴史とは何なのか、何を教えればいいのか、沖縄の歴史を知れば本当に沖縄問題は解決されるのかが焦点になる（ある意味で解決を目指すために編まれた沖縄の歴史像は恣意的なものではないのかという批判もでてくる）。もちろん、政治的に問題が先鋭化されると、その背景を理解するために「歴史を知ろう」という関心がでてきてもおかしくないが、先ほどの薬害の授業を通して見えてきたよう

に客観的事実（年表的歴史像）を示すことで、問題解決に役立つかという点、そこにはもう一工夫必要がある。とはいえ、その工夫が「政治的」とみなされると「偏向」という批判にさらされるリスクが高まる。みんなが満足するように配慮して“無難”な歴史教材をつくれば、「気持ちを知る」という本来の意味から遠ざかる。

それでは“気持ちを知る”と“事実を伝える”が、どのように両立可能なのか、次章では、私がおこなった「琉球処分」に関する授業実践を取り上げて、検討を加えていきたい。

3 「琉球処分」の言説を考える

日本史概説等の授業で「琉球処分」を取り上げた際、高校の教科書（山川出版社版）と沖縄側の「琉球処分」観の一端を知るという意味で2015年4月に開催された「琉球弧の自己決定権を考える」シンポジウム⁽⁶⁾のチラシ⁽⁶⁾をあわせて配った。これら資料を通して、「琉球処分」の歴史といっても可視化されるものと、不可視化されるものがあることを説明している。

「琉球処分」の歴史過程と、それが沖縄の人々に刻み込んだ「遺産」の両方を知らなければ、あのチラシが生まれた背景や異議申し立ての意味を理解することは難しいであろう。つまり、歴史の教科書を読んだだけでは、沖縄の人が「琉球処分」という言葉に込めた意味を理解することは、ほとんど難しいのである。

こうした説明だけでなく、私は概説系の授業で、「あるテーマを設定し、通史本またはテーマに関する本を3冊選んでどのように記述されているのか比較してください」というレポートを出しているが、このレポート意図を明らかにするため、具体例として、いくつかの通史本を取り上げ、そこでの「琉球処分」の記述の違いを紹介している⁽⁷⁾。復帰前後という時期的な問題や、沖縄側の視点の有無など、限られた紙幅の通史本の中でも「琉球

処分」の記述に違いがあることを教えている。たしかに時間をかければ理解してもらえるかもしれないが、半期で古代から現代まで（もしくは、半期で近現代という）日本史概説の中で、「琉球処分」を1回（または、複数回）やることは難しく、結局特論的に扱う必要がでてくる。そうすると、沖縄以外の人に、「琉球処分」を含め近現代沖縄の歴史を扱い、沖縄の人と同じような心持で歴史を理解することが可能なのか、情報量の格差や、聞く側の価値観の問題など、様々な問題がでてくる。授業というのは、限られた時間のなかでやるものなので無限定に時間が与えられているわけではない。本当の教養とは、獲得した思考力を応用力のことだと思っているので、すべての事象を教える必要はない（とはいえ、授業をしながら感じるのは、応用力獲得を見届けて終えたという達成感よりも、一問一答式の知識の身につけかたを壊すに至らないで授業を終えてしまう反省感の方が強い）。

極論すれば、前提条件の違いを埋めることは難しく、お茶を濁す程度の内容でやると、溝は溝として残る。この溝を埋めなければ、理解できないと捉えるのであれば、時局柄、速成的なやり方に向かいかねない。とはいえ、速成で身につけると速成で忘れることになりかねないので、速成式学習に頼ることも問題である。もう一方で、簡単に解決は出来ないと迂遠の道だけを提示するのも、学習者の視点で考えると、問題が残る⁽⁸⁾。

先ほど宿命論を避けると書いたが、それはチラシ資料から読み取れるように、沖縄から「本土」に向かって沖縄の歴史を語るとき、解決を求めながらも、「ずっと差別が続いてきた」と「宿命論」的な語り方に陥りがちだからである。これは語法をめぐるある種のもどかしさといえよう。また、「沖縄の人」と無限定に書いてきたが、沖縄の人がすべて同じ心情を持つとは考えにくい。筆者自身、ここ数年、沖縄近代史（歴史）の立場からゲスト

講義などで話すよう依頼を受けてきた際に、「ずっと続いてきた」という語り方や、ある単体の「沖繩の人」を主語にした語り口を避けようとしてきた。その理由として、概略・現状批判的で語ろうとすると、ある面で、現状の問題点を明示するため、「琉球処分」、旧慣温存政策、沖繩戦、米軍占領と基地問題という内容で整理しがちになる。こうして整理された歴史像は短い時間で要点を伝達できる利点はあるかもしれないが、似たような事例は同じ理由であると、歴史背景の違いを軽視することになると考えたからである。

もっとも、時事問題で歴史を生業とする者が呼ばれるのは、時系列的な説明か、問題の歴史的背景を説明するためかもしれないが、この歴史的背景というものが曲者である。現在と断絶した「過去」があるわけではなく、現在の社会情勢や価値観が投影されている以上、もしかしたら、歴史家とは過去から現在に至る過程を客観的に説明しているように見えながら、実は、現在に帰結するように過去を整理して語っているかもしれないからである。現在の価値観に拘束されて歴史を語るという構図は、歴史学のイロハの部類であるが、学術論文の生産を専らとし、政治問題から距離をとっていると思っていると、忘れがちになる落とし穴である。こうした拘束性だけでなく、歴史叙述とは、現在の聞き手に満足させるように（もう少し控えめにいうと、現在の読者が理解できるように）歴史を語るものである。このように言えば、多くの歴史家は怒るかもしれないが、価値観と話法が現在に規定されているのなら、自虐的歴史／自尊的歴史も、その鋳型が違うだけで、現在の価値観に規定されて歴史像はつくられるという理屈は同じである。

4 我々意識の射程、「同情」が意味するもの

前章では、鋳型が違うだけで理屈は同じということ述べたが、それでは、無関心を回避させる

ものとして、「同情」⁽⁹⁾ というものが必要なのであろうか。「同情」について考えてみたい。

まず、明治中頃に人頭税被害に苦しむ先島を探検した笹森儀助を事例に考えてみたい。笹森は沖繩への差別視が強かった近代において、沖繩に「同情」した人物として沖繩でも肯定的に評価されてきた。とはいえ、「同情」しつつ笹森は「該島ノ基礎ヲ確定シ、荒蕪ヲ開墾シ、人材ヲ繁殖シ、物産ヲ興隆シ、我カ南門ノ鎖鑰ヲ固フシテ」⁽¹⁰⁾ と撫育、殖産、国防充実をセットにした提言をしているので、笹森の「同情」には国権的（戦略的）な側面が少なからずあったことは否定できない。こうした笹森の国民主義思想を分析した檜皮瑞樹は、笹森の周辺への眼差しを以下のようにまとめている。

笹森の国家観、周縁への眼差しは、結果として強烈な国家・国民化への志向性を創出する。彼は、政府の北方警備・アイヌ政策を批判し、周縁的存在へのシンパシーを強く意識しながらも、国家という存在を相対化するのではなく、逆に国家と一体化することを強く志向する。…(略)…笹森は、「探検」という実践を通して国家から忘却される存在としての「周縁」を発見し、その周縁的存在と自らとを重ね合わせながら、国家に対してその保護を要求したのである。このような笹森の思想は、近代国民国家の建て前であった「四民平等」の不徹底への批判や、自国民への保護を疎かにしながら領土的拡大を企図する国家の方針への批判を可能にする。…(略)…笹森は周縁への実践とそこからのシンパシーを得ることで、国家への内在的批判を可能にしたのである。⁽¹¹⁾

続けて檜皮は「笹森のヒューマニズムが持つ両義性と不可避な政治性を軸に置いた歴史的評価が行われなければならない」⁽¹²⁾ と述べている。檜皮は「ヒューマニズム」と書いているが、これは私

が言う「同情」とほぼ同意と考えて話を進めていく。

「同情」もそうだが、それに付随する思考や態度というものも歴史的に作られた感情であり、その点を踏まえて現状を見ていく必要がある。それでは、笹森の事例を通して考えた「同情」の問題を現在に戻って確認していきたい。

考える糸口として、註4で紹介した戦後沖縄・歴史認識アピールを事例にすることが最適であろう。あのアピールが生まれる背景は、菅官房長官が発した一言であった。彼はみんな苦勞して現在の繁栄があるので、沖縄だけが苦勞したような歴史像に異論を呈したわけだが、歴史家は彼のこの戦後史理解を批判した。もちろん、歴史像は主体的な行為の産物であり、多少の「歪み」が存在するのは当然である。そうであるがゆえに、議論をとおして共有部分を求めることが必要になる。もっとも、自己完結の歴史像に満足して、議論をさけて強硬突破したいという考えもあろう。更には、政治家の教養を歴史家が試験をして判断したいと考えても、授業とは違うので、誰が作問するのか、どのような内容の問題を出すかといった入り口から議論百出して收拾がつかなくなるであろう（数年前に二重国籍が問題になったが、政治判断する能力で考えれば教養も重要な問題である。教養の有無は合法／違法とは別の次元であるし、唯一の基準で測れないが、教養の質が問題にならないのは不思議なことである）。ちなみに彼は「戦後生まれなので、なかなか沖縄の歴史は分からない」との発言もしている。「謙遜」なのか「無知」なのか、文脈を知る必要もあるが、公人は全員代表としてふるまうことが必要であるならば、「無知」と読み取られる発言は己の教養の欠如をさらけ出すだけで、批判は起きなかった。

「沖縄の歴史を分かってもらえない」、「沖縄の痛みが分からない」と、不満の言葉が沖縄側から発せられることがある。国民共同体において、「同

情」の不在はどのような問題になるのであろうか。さらにその背景を知ることが不要なのか、そういう問いが出てくる。もちろん、このように問いつつも、解決策として全体主義的な価値の統合を目指すことは問題がある。だからといって、共感をめぐる感情の不在を放置することは問題なしと言えない。それでは、「戦後生まれなので、なかなか沖縄の歴史は分からない」と発する態度は何を意味するのであろうか。それは国民統合における（歴史部分に関する）教養の不在を不在のままではよいと正当化した宣言といえる。そのため、アピールを出した歴史家の取り組みは、その不在正当化宣言への異議申し立てといえる。不在宣言と異議申し立ての間において、それでは、どの程度の理解が必要なのか、個人レベルと社会レベルの教養量の問題に結びつく。さらに歴史は国民統合の1つの手段であるとするならば、その知識量とは誰が判定するのか、そもそも、なぜ、学校教育で歴史を教えながら、歴史の不在が政治の場で堂々と宣告されるのか、考えなければいけない問題が沢山でてくる。とはいえ、論点の羅列だけでは收拾がつかないので、便宜的に本稿の目的に沿う範囲で論点を述べれば、なぜ、ご都合主義的な歴史観がまかり通り、教養の不在が不問にされ、強権的に政治が進むのかということになる。

この問題と同時に、民間の保守、もしくは愛国者と自称する人たちの、沖縄に向けて発せられるヘイトスピーチの1つに「いやなら日本から出ていけ」という発言をセットにして次章で考えてみたい。

5 1995年に提起された保守の問題

先述したように私は沖縄の歴史を紹介する講座を数回やってきたが、その際、1996年に刊行された『発言者』という雑誌に掲載されたある発言と、2013年のオスプレイ配置撤回を求めるデモ行進にヘイトスピーチがかけられたという記事をセット

にした資料を配って感想文を書いてもらってきた。前者の『発言者』の記事は、1995年の少女暴行事件を経て、沖縄への向き合いかたを保守側が議論したものである。この記事で高澤秀治は、知花昌一や大田昌秀の思想や行動を述べつつ「つまり彼らは単純に自分たちを日本人だと思っていないということです。沖縄のナショナリティにはそういう複雑さがある。私は左翼的な観点から言ってるわけではないのです。沖縄は現代の保守にとっての一つの試金石だと思うのです」⁽¹³⁾と述べている。私は授業でこの高澤の「沖縄は現代の保守にとっての一つの試金石」に注意するよう述べて、続けて2013年に沖縄からの抗議運動にヘイトスピーチがあびせられたという文章を紹介して、「『一つを試金石』という危機意識から、おおよそ20年たとうとして、ヘイトスピーチに至ったわけだが、それは日本の保守にとって、必然と思うか、逸脱と思うか、私見を述べてください」と、簡単なコメントを書く宿題を出した。

この課題は、どのような立場で書くかによって逸脱にも必然にもなるので、どちらが正しいか、二者択一的に見極めることが大事ではなく、受講生がこの20年の軌跡をどのような文章にして理解するかを確認したいと考えて出した課題である。提出されたコメントを読んでも、まず第一に、20年という年月は長く、受講生からすると自分の人生とほぼ一緒の期間になる。こうした、時間幅の変化を捉えることは難しかったようである。第二に、沖縄をめぐる問題があることと、保守という言葉は知っていても、沖縄問題に取り組む保守（グループ）という視座はなかったようで、この枠組みで問題を把握するまでには至らなかったようである。よって第三に、逸脱／必然と時系列にそった論理での説明は弱くなる。そのため、全体的に回答を見ると、ヒューマニズムの視点から「差別的な発言はよくない」という文章が多かった。

ちなみに、前者（高澤の発言）は再統合の言説

であるが、後者（ヘイトスピーチ）は排除の言説である⁽¹⁴⁾。このように整理すると、なぜ、国家意識の高まりがあるにもかかわらず、分断を助長するような論調が優勢になってきたのであろうか。単に「留飲を下げるため」と言われているが、こうした自己都合の論理と国家意識を前面に出す語彙とのズレに筆者自身気になるところがあった。そのため、あのような問題を出して、納得するものを探そうとしたのである。

結果は、前述の通りであったが、感想文を読みつつ、改めて考えてみると、中国脅威論が背景にあるのなら、なおさら、団結にむけて説得と冷静な状況分析に勤しむ必要があるのに、危機に立ち向かうため、純化（異論排除）の心性が優先されることに、ヘイトへの危機感よりも、安易に排除の言説に向かっていく「愛国者」の心性が有する問題点の析出が必要になってくる。そこで次に古いものであるが、吉野作造の文章を手がかりに考察を進めていきたい。

かつて吉野作造は「支那に対してこれだけのことをやった、…（略）…朝鮮に行ってはこれだけの善政を布いている、それで相手方は不平を言うはずはないとこう決めている。しかし一寸の虫にも五分の魂がある…（略）…人間はそういう一種のヴァニティと申しますか、一種の独立心と申しますか、…（略）…そういうものを尊重してかからないと、ややもすれば親切が仇になる」、「朝鮮に暴動が起こった、宣教師が先導したのであろうという。支那に排日が起こった、なんでも親米派とかいう部類の支那人が煽動したのじゃないかという、…（略）…かく見ることによって事件の真相を見誤る恐れはないだろうか」、「自分を反省することなくして、いたずらに他を責むることでは、その問題の根本的な解決に達することは到底できない」と述べている⁽¹⁵⁾。

吉野の指摘は、1920年代の朝鮮や中国における抗議運動理解において、自分たちは良いことをし

ているのに、運動が起きるのは、背後に運動を操る人がいるという、「自分の行動は正しい」という点を自明の前提にして、陰謀論的な発想で外部に原因を求める思考を批判したものである。読者のなかには、こうした思考が過去の遺物ではないと思う人もいるかもしれないが、もちろん、度々述べているように、日本人全員がこのように考えているわけではないので、「日本人論」に還元して議論をするために吉野の文章を引用したわけではない。吉野の文章を読みながら現状の出来事を考えると、沖縄を含めた国民共同体を維持したいのなら、沖縄の人に出ていけというのではなく、政府要路の中にいる沖縄への理解を欠如した発言に対して「何を言っている。反省しろ」と批判をするのが愛国的心性として筋があると思えるのだが、そのような行為は起きず、何故、ベクトルが逆になるのだろうか。反省する思考を身につけることができない人が多いとするならば、それはどうしてなのか、考えてみると新しい課題が見えてくる⁽¹⁶⁾。また、仮に「中国脅威」というものが一定の事実による判断であっても、そこから沖縄の人たちをヘイト攻撃しても、利敵行為にしかならないであろう。冷静に考えれば、不思議な立ち居振る舞いである。吉野の指摘を引用するまでもないが、失敗の繰り返しのような心性がどこにあるのか、最後にこの点にふれつつ、まとめとした。

6 まとめ

これまで、他者理解の難しさや、歴史理解の掛け声がありながら、その必要とされる歴史像の情報量や中身の確定が難しいことを述べてきた。冒頭で、LGBTの回答ではじめたので、今度はLGBT理解を拒否する回答を紹介しながら、まとめていきたい。その回答には、「ほぼ全ての人々の生活圏内に無理に入ろうとしないことが必要ではないだろうか」または、「自分が述べようとし

ている意見（LGBTに好意を寄せられない意見）を誰にも犯されない社会を創ることが大きな課題だと思いました」というものである。これらはLGBT差別反対の声が高まったことを踏まえ、なかなかそれに同意できない自分を守るために発したものであり、「自分の内面への介入」を避けたいが故の発言にみえる。これら回答は、積極的に他者に差別的な発言を投げかけるものではなく、防御に名を借りた排除の心性である。もちろん、回答には差別するつもりはないと書いてあるが、性的少数者が被った同調圧力による苦痛への理解に向かうのではなく、その権利回復の声によって、自身が被った「苦痛」を救済したいという気持ちが全面化することになっている。

他者への苦痛の共感が喪失しているといわれているが、その打開策として、共感的同情の回復を想定しても、4章で指摘したように単一的な国民的共感に還元することも現時点では問題がある（とはいえ、予め理解することを拒否する態度も問題である）。違いを踏まえて、理解する道を探していきたいのだが、それが難しいのであれば、その理解を妨げる「壁」⁽¹⁷⁾というものを析出する必要がある。

この「壁」は「本来的」に存在するものではなく、歴史的産物として、絶えず変容しながら再構築されている「壁」であろう。とするならば、現在の「壁」はどのような材料で構築されているのか考えてみたい。個人的な見立ては、平和国家、経済大国、（生活保守主義とセットになった）中流意識という戦後の自明性が喪失していることへの不安、この「喪失による不安」を材料にして新しい「壁」をつくっているのであろう。

ここで言う「戦後」とは、一部の政治家が声高に主張するように現在の閉塞感を象徴するような「戦後」（憲法体制）ではなく、自らのよってたつ基盤としての「戦後」（個人の権利を保護した生活の安定）のことである。もっとも、守りたい／

解体したいという2つの「戦後」は同根であるにもかかわらず、不安を感じる人の一部は、不安からの脱出をめざして「閉塞する戦後」（憲法体制）からの脱却に同調するようになる。それは解決を目指す行為ではなく、目減りしていく「基盤となる戦後」（権利の尊重）を自身の手で壊している行為といえよう。基盤が壊れることによって、ますます不安になり、その追い立てられる不安でますます基盤を壊していく。こうした悪循環のなかにいるのであろう。

本稿とほぼ同時期に、筆者は授業実践の小論をかいていたが、その文中に、学生は「直接かかわったわけでもない戦争がもたらした未決の問題と財政赤字という大きな「負の遺産」を引き受けなければならない。そうすると、学生の心の中には、この「負の遺産」をつくりあげたものに対する「敵意」または「心の不安」を抱いてもおかしくない。これまでの平和教育は、こうした「心の不安」をあまり重視してこなかったと思う。「心の不安」を無視して、学生に過去の「負の遺産」を素直に引き受けろというのも調子が良すぎる」⁽¹⁸⁾と書いた。この一文は、若者の閉塞感による「苛まれ」と歴史意識の関連性を見極めたいと書いたものだが、こうした「苛まれ」感にしろ、「喪失の不安」にしろ、これらは林志弦がグローバル化のなかで「自民族の道徳的真正性を泣いて訴え、国際社会に認めてもらおうとする」「犠牲者意識ナショナリズム」⁽¹⁹⁾に通底する自己意識の問題を感じる。さらに言えば、それは、先にLGBT理解の風潮への拒否感を示した回答文と同じく、他者が被った被害への理解ではなく、自己の感じる被害への回復が優先される思考との近似性（互換性）といえよう。つまり、ここでの自他関係は、自己を有利にするため、他者への犠牲を強いる構図を肯定するか、もしくは、自己の気持ちを保持するため、他者の声を排除するように、救済を求める肥大化した自己認識といえる。

「本来性」ではない形で相互理解の難しさを考えてみたいと思い、現在の相互理解の難しさをつくる要因を考察してきた。その結果、「喪失の不安」が行動や価値判断の基底にあると見立てたのが本稿のまとめである。このように考えると、未来の希望を提示する結論をもって来るよりも、ある授業⁽²⁰⁾の最後によく配っている資料（カフカの「罪、苦悩、希望、真実の道についての考察」）を紹介したほうが、適当と思えるので、最後にカフカのエッセーの一文を引用して終わりにしたい。

人間は、焦りのために楽園から追われ、投げやりのためにそこへ戻れない。しかしほんとうは、ただ一つの主要な罪、焦りがあるだけかもしれない。焦りのために楽園から追われ、焦りのために戻れないのである⁽²¹⁾

註

- (1) 脈絡は違うが、ここで山田昭次『植民地支配・戦争・戦後の責任』（創史社、2005年）のまえがきを紹介したい。大学就職直後の新米教師の山田は「先輩先生」から朝鮮大の「金鐘鳴先生」を紹介され、朝鮮人学校統制を目的とする動きがあるので一緒に反対する運動に協力するよう言われたので、行動案を作成したのだが、先輩の先生たちからは焦らなくてよいといわれ、とりあげようとしなかった。一方で「金先生」から督促を受け、身動きが取れないような状況になっていった。そうした中、「金先生」が発したある一言に衝撃を受け、山田が自身を「勝手に動き出す人間に変わった」というエピソードである。あわせて、進歩的日本人知識人の問題にふれ、「問題があるのは日本の支配層だけではない。左翼とか、進歩的と言われる日本人知識人も、朝鮮人との間にある距離はひどく遠い」のではないかと自問して、自由民権派の朝鮮問題に

取り組んだと述べている。この知識人の問題に関して、徐京植は『日本リベラル派の頹落』という、刺激的なタイトルをもつ本で批判しているように「リベラル」の態度は、けっして、過去のものでも、無傷なものでもなく、批判にさらされていることが分かる（ちなみに、徐の批判は所謂「保守」と自称する人たちのリベラル批判とは一線を画すものである）。もっとも、ここで徐の議論を紹介しているが、正直に言うと、私自身は徐と志を同じくする随走者ではないと思う。にもかかわらず、自分のことを棚上げて引用したのは、無関心にも「関心がなくて知ろうとしないタイプから、関心を寄せつつも自分からは火中の栗を拾わないタイプ」のように様々なタイプがあり、ひとくくりにはできないことを示したいと考えているからである。それだけでなく、私が授業で述べている「身の丈に合った言葉と態度を探すように」の意義と限界を示すためでもある。徐の批判は「正論」であると思うし、沖縄からの「本土」の人が見せる立ち居振る舞いへの批判の根底にも、こうした不信感があるのかもしれない。だが、運動の歴史を考えた場合、規範を示し「正論」を言い続ける人も必要だが、それだけでなく、折り合いを提示する人も必要であろう。無関心と「1つの正しい道を実践する」という行動の間の幅を広げたいと考えて、ここで一言書いた次第である。

- (2) 根源的な形で沖縄と「本土」の関係を問うた木下順二の「沖縄」が上演されたのが1963年であり、「本土」側の「無意識」を前面に出して批判した野村浩也の『無意識の植民地主義』が刊行されたのが2005年である。このように並べると、「宿命論」的なロジックも成立しそうだが、後述するよ

うに本稿は「宿命論」も批判的検討の対象にしている。

- (3) ちなみに、日本の防衛政策の一環で佐賀空港にもオスプレイの配置が発表されている。
- (4) この点から考えると、鹿野政直・富山一郎・森宣雄・戸邊秀明の各氏が呼びかけ人になった「戦後沖縄・歴史認識アピール」の会が、その呼びかけ後に取り組んだ課題が日米地位協定であることは卓見であるといえよう。この取り組みの成果は、2017年7月15日に「日米地位協定から見る沖縄・日本・世界」という集いを開催している。
- (5) もっともパンフレットはこのような試験方法が提案されているわけではない。パンフレットの学習ポイントは3つの点（1点目は、関係者がどのような役割を果たしたらいいのか、2点目は、消費者の立場からどのように情報発信をすればいいのか、3点目は、今の社会の仕組みで改善する点はないか考えてみよう）から問題を提起している。特別学習用のパンフレットだからであろうか、このパンフレットの問いかけは採点が難しいことを聞いている。学校という場所に即してこのパンフレットを読むと、あらゆるものを採点評価し学生をがんじがらめにしようとする教育現場と、社会を生きる上で自由に考えることを身につけるといふ両立が難しい現在の学習環境を逆に露呈しているような気がする。
- (6) このチラシには「琉球・うちなーは1609年の薩摩藩による侵略以来400年余、ヤマトの一方的な支配に呻吟してきました。とくに明治維新ではヤマト民族への民族浄化策が武力を背景に断行され、日本国へ強制的に併合されてしまいました」と書いてある。
- (7) 「つまり、琉球処分は、最終的には強行されたものかもしれないが、実際のところ琉

球が政府からの要望に長年応じなかったことと一度松田から与えられたチャンスを拒否したことにも原因があるわけであって、一方的に政府が悪いとは言えないのではないかと私は考えた。」こういう意見も出てくる。

- (8) 筆者は以前「強権的な解決を目指す気がないのなら、ズレの違いに怒ったり、嘆くより迂遠の最善を考える方を選びたい」（琉球新報、2016年6月21日号）と書いた。「迂遠」をめぐって矛盾があるような書き方であるが、教師の視点と生徒の視点のように補完として読んでいただきたい。
- (9) しばしば言われるように、上から目線の恩恵としての同情は問題がある。力関係も存在するため、安易に同情という言葉を使うことに問題があることは了解している。ここでは、理解など断絶を埋める行為（心情）を便宜的に一言であらわす言葉として同情を使っている。
- (10) 笹森儀助『南嶋探験2』（平凡社・東洋文庫、1983年、302頁）。
- (11) 檜皮瑞樹「19世紀後半の日本における北進論と国民国家構想」（久留島浩・趙景達編『アジアの国民国家構想』、青木書店、2008年、72頁）。こうしたマイノリティ理解の歴史的成果と限界を知ることが必要であろう。もう一方で、山崎望が「マジョリティでありつつも『想像された (imagined) 強者であるマイノリティ』によって被害をうけているという『被害者意識』を強く持つ点に特徴がある。…新自由主義による競争原理が貫徹する中では、全員がマイノリティに対する優位を保っている保証は低下しつつあり、結果として既存の『力のあるマジョリティ』と『力のないマイノリティ』という図式の自明性が低下している」（山

崎望「序章 奇妙なナショナリズム?」、山崎望編『奇妙なナショナリズムの時代』、岩波書店、2015年、12頁~13頁）と、マイノリティ問題を不可視化させる現象が現在みられるという指摘もあわせて、現状を見る必要がある。本文で述べた、教養と“同情”の不在とこうした他者認識を踏まえて、発話の構図を考える必要があるだろう。

- (12) 檜皮前掲書、73頁。
- (13) 『発言者』1996年8月号、15頁。
- (14) この点で考えると、対立的にみえる天皇と政権の関係であるが、基地建設と再統合について補完関係であると説明することもできよう。
- (15) 吉野作造「まず自己を反省せよ」（伊東昭雄編『アジアと近代日本』、社会評論社、1990年、82頁~84頁）引用文中に現在では差別的な表現が含まれているが、原文の歴史的な性格を考慮して、そのままにしている。
- (16) 安田浩一の『「右翼」の戦後史』（講談社現代新書、2018年）を読むと、安田は「おわりに」で、辺野古の基地建設反対の主張をしている右翼を紹介している。そこで、安田が一般的にイメージされる右翼と違いますねと質問すると、彼女は「民族派としては当然…民族派を自称するのであれば、他国の軍隊が日本に居座っている状態に異を唱えて当然です」と答えている。だが、安田は、その考え方は右翼という世界にあっては異端でしかなかった、とまとめている（275頁）。先に統合から排除に力点が移行したと述べたが、右翼社会で統合の論理ではなく、排除の論理が横行していることに注目する必要があるだろう。
- (17) 安保問題を再構築するために沖縄と「本土」の関係を「壁」や歴史認識の面から考察している平良好利の以下の論考（「沖縄と本

土の溝」(五百旗頭薫ほか編、『戦後日本の歴史認識』、東京大学出版会、2017年)、
「2つの『壁』から沖縄を考える」(『歴史学研究』971号、2018年6月)も参考になる。
平良の議論は、感情で対立しがちな安保をめぐる議論を対話可能な面を見つけていく(科学としての)土俵づくりの試みであるとするならば、本稿は土俵をつくりながら、それを壊すようなこともする人間のパッションに注目したといえる。

- (18) 高江洲昌哉「戦争体験をどのように引き継ぎ解釈するか」『青山スタンダード』14号、2019年。
- (19) 林志弦「グローバルな記憶空間と犠牲者意識」(橋本伸也編『紛争化させられる過去』、岩波書店、2018年)。
- (20) この授業は、戦争認識を扱う授業で、多様な歴史像を共有するために「心の余裕と語彙力の豊富化」を目指すとして述べているもので、「心の余裕」の対比で「焦り」について考えるよう提示している。
- (21) 『決定版カフカ全集3』(新潮社、1981年、29頁)。